

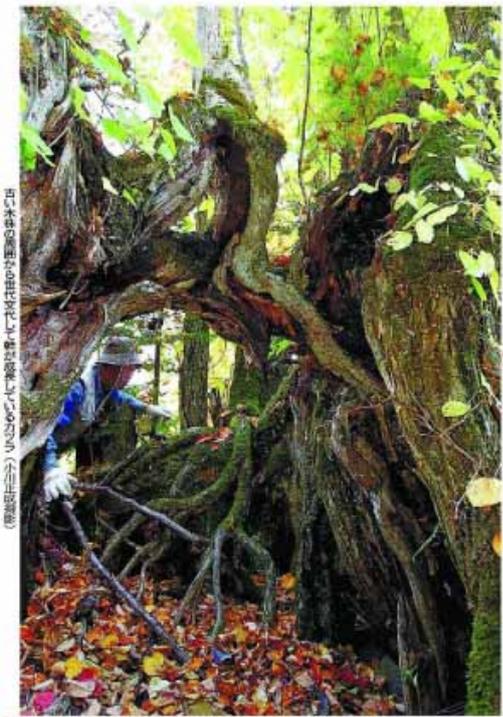
道新連載記事「続・富良野の木に会う」

読みもの・コラム

投稿者：：

Posted on : 2010-12-14 17:20:00

2010年秋に連載された第2弾です。(北海道新聞社許諾 D1012-9912-00007004)



古い木々の間から現代まで、静かに歴史を刻みつづけている。富良野の森は、秋の訪れと共に、色とりどりの装いへと変身する。その中でも、最も目を惹くのは、古くから伝わる「カツラ」の樹木である。その樹皮は、まるで彫刻の如く、複雑な模様を刻みつけている。その葉は、心臓の形をした美しいハート形をとり、甘い香りを放つ。この木は、富良野の森を彩るだけでなく、人々の心を癒す力も持っている。今回は、この「カツラ」の魅力を詳しく紹介する。

富良野の木に会う

ガイド・倉橋隆夫さん

①カツラ

富良野市山内にある「カツラ」の森。カツラは、富良野市山内町にある「カツラ」の森で、その樹皮は、まるで彫刻の如く、複雑な模様を刻みつけている。その葉は、心臓の形をした美しいハート形をとり、甘い香りを放つ。この木は、富良野の森を彩るだけでなく、人々の心を癒す力も持っている。今回は、この「カツラ」の魅力を詳しく紹介する。



富良野の木に会う

カツラ

形や色彩、環境と調和

富良野市立中央図書館蔵 富良野市立中央図書館蔵 富良野市立中央図書館蔵



富良野の木に会うガイド 倉橋昭夫さん

③オオモミジ

ふれあいの森の樹々は濃い緑で覆われていたが、落葉期が近づくと黄緑色の紅・黄色に染まるものが多い。9月になるとオオモミジに赤い葉が映えてその色鮮やかさが増し、秋も深くなってきます。紅葉の王様はオオモミジ、ハワチワカエダ、メイツカエダですが、それを取り立てておくツラ、シラカンバ、チョウセンヤマナシの黄葉、針葉樹下のマツの濃い緑のコントラストが素晴らしいです。

緑や黄に映える「紅」

富良野の針広混交林に生ずる樹木の花、葉、新緑の美しいものがたくさんあります。これらを組み合わせて四季の變化を感じることができ、富良野の自然を身近に感じたいものです。富良野の学校の校舎にはオオモミジとハワチワカエダが植えられています。葉の形が美しく、子供の思い出の樹木を持つのがオオモミジの仲間です。富良野には桜が、オオモミジ、オガラハナ、濃い色になるでは、オオモミジが主役です。森の中で遊ぶ子どもたちをよく見かけるのはオオモミジの仲間です。(富良野市立図書館蔵)



富良野の木に会うガイド 倉橋昭夫さん

④シラカンバ

白い樹皮「森の佳人」

シラカンバは、富良野の針広混交林に生ずる樹木の一種で、白い樹皮が特徴です。葉は緑色で、秋になると黄色やオレンジ色に染まります。富良野の自然を身近に感じたいものです。富良野の学校の校舎にはシラカンバが植えられています。葉の形が美しく、子供の思い出の樹木を持つのがシラカンバの仲間です。(富良野市立図書館蔵)

④ 富良野の木に会う ガイド 高橋昭夫さん

クワリの実験地帯は、北海道では道庁付近が北限とされており、富良野地方でも、富良野地方で見られるのは富良野ではなく、古い時代に富良野とす。農家の屋敷へは枝の広がった大木が各所で見られます。大木の風パルクゴルフ場にも、むかし藤巻を築いていた時代の木が残っています。今は木が少なくなりましたが、この木から安らぎを感じています。樹皮を虫類がおおい美しい樹皮を

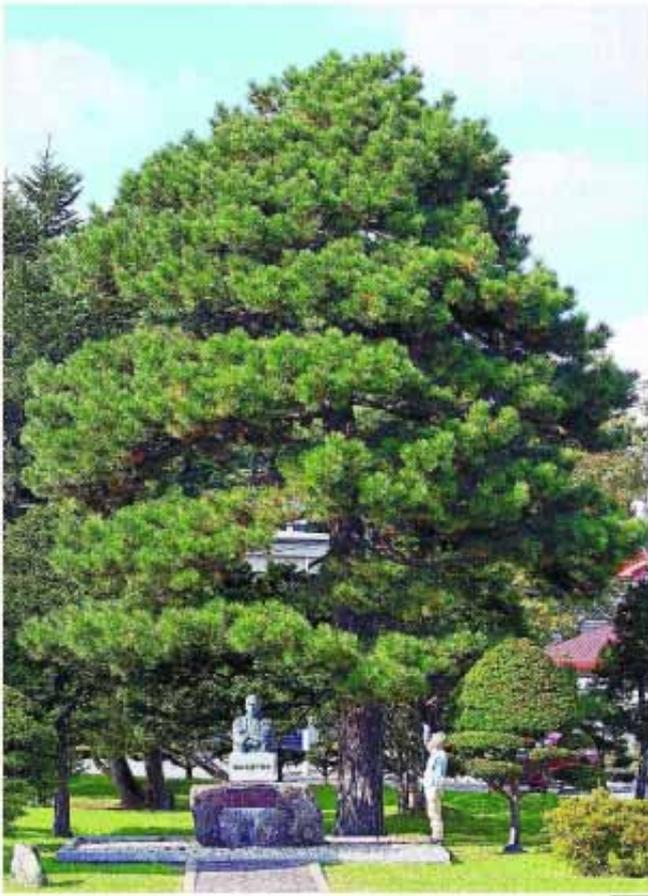
⑤ クワリ

芝生上の姿に安らぎ

7月、白い霧のりど下がった花が咲き出す。果実は10月に熟し、この果実の殻が包まれており、四つに分かれます。近くの山に生息するクワリの重要な食料となり、山に運ばれて身を出したクワリの大木は、ぬとくろで果がれます。太陽の光、よれあいの森にもあります。果の四つくは、樹土の広葉樹類の10日〜2週間開花し、10月中旬から11月にかけて黄葉を散らして迎えます。(中井科学館センターボランティア友の会代



パルクゴルフ場のクワリの木を撮影（中井科学館）



富良野市の樹木の像に立つヨローバクロマツ。樹木の枝ぶりは大きい（富良野市観光課提供）

⑧ 富良野の木に会う ガイド 倉橋昭夫さん

⑧ ヨローバクロマツ

ヨローバ類のクロマツは、雄株が大きく、冬葉が白頭で大きく、葉の長さも非常に長く、樹皮は赤褐色から黒褐色、冬葉は深く裂けます。ヨローバアカマツとは秋葉、冬葉、葉の長さ、樹皮の色で区別されます。クロマツが男性的です。

大きな枝ぶり 男性的

富良野市役所の前庭で「富良野市樹木の像」が立つ。中村千鶴の銅像が立つ。ヨローバクロマツとヨローバアカマツが並んでおり、中村の銅像の周囲にも樹木を植え、植えてある所があります。ヨローバクロマツの「雄株は、子供たちの「遊び」の場として使われる。

ます。

日本のクロマツは「雄株」・アカマツは「雌株」と呼ばれて身寄りあり誰かが知り、採しみを待たれていま。本州以南を産出とするこの巨樹は富良野地方の雄しい気象環境では生育が不適です。元人はそれに代わって富良野で育つヨローバ類のクロマツ、アカマツを身近な庭木として植えるのでしよう。同類のもの、ヨローバクロマツを認めることは少ない、この地により稀するヨローバアカマツが広く植えられています。（富良野市樹木センターボランティアの代表者）

富良野の木に会う

ガイド 倉橋昭夫さん

山部用街地の西側端に青杉林となり、朝夕の寒みがかかった銀緑色を呈する。たまたま、山にも利用されています。針葉樹特有の美しい葉の広い葉地には、多く、郷土産と外産種を組み合わせ、スノーラン、ドイツの人のための提供によつて、合わせ、配られた小さく、北ヨーロッパをコンパイルしています。新緑のなかなには、フル、葉して、この木は多くの所、の産をて植えられていて、とても人気な高いことが伝わり、植えられた。

⑫ プンゲンストウヒ

銀緑色 北欧でも人気

思案れた緑地帯には、1・スルウス、等は、北に往いた、共通して入園者の保護体層に大き、れるアメリカのプラン、葉される樹種のように、な状態を来たした。ゲンストウヒが大きい。葉、今でも成長で、ついでいます。葉の色は、(市生園子園センター)安心して樹々に植られ、完全体の古い葉は銀緑色、ランティ、ア(の代表)る場所として、子、その、新しい葉では、



若い葉の銀緑色が光るプンゲンストウヒ (小川三成撮影)



富良野の木に会う

ガイド 倉橋昭夫さん

⑬ カラマツ

本州由来 植栽から70年

カラマツは、本州由来の樹種で、明治時代から本州から北海道に導入された。現在、富良野市には、カラマツの植栽が70年以上にわたって行われており、その数は約1000本に達している。カラマツは、成長が速く、丈夫で、木材としても利用される。また、その葉は、乾燥させてお茶として飲まれることもある。カラマツの植栽は、富良野市の景観を彩るだけでなく、地域の歴史や文化を伝える役割も果たしている。



樹は公共施設に保存されている。樹体の力でマツ丸太と円盤 (いずれも小川三成撮影)

